

書 評

ガヤトリ・C. スピヴァック著
鈴木聡、大野雅子、鶴飼信光、片岡信訳

『文化としての他者』

渡 部 充

著者のスピヴァック (Gayatri Chakravorty Spivak) は上層カーストとしてインドの西ベンガル州に生まれ、カルカッタ大学を卒業の後、アメリカに留学してポール・ド・マンのもとで学び、現在はアメリカの大学で英文学の教授を勤める批評家である。英米文学研究者で現代批評理論に関心のある者なら彼女の名前をジャック・デリダの『グラマトロジーについて』(英訳題 *Of Grammatology*、1976年出版)の英訳者として、周到かつ緻密なデリダ読解であるその長大な訳者序文とともに記憶しているに違いない。もちろん、文学、精神分析学、社会学、経済学、政治学といった既成の学問体系のなかで分断されている諸領域を縦横に往還する彼女の批評的営為は、狭い意味での文学批評の範囲にとどまるものではありえないし、同様に、その脱構築的実践を制度的な「フェミニズム」ないしは「女性学」の内部に囲いこむこともできない。アメリカの大学に職を有する旧植民地出身の女性の学者として、本書の原題である *In Other Worlds* のいう「他のさまざまな世界」との往還を繰り返すことで、自らの批評を問い直し続けてきたその活動は、「脱領域的」だの「学際的」だのという形容詞を陳腐なものに感じさせてしまうほどに先鋭的である。

本書はスピヴァックが1977年から1987年にかけて展開した多様で(訳書の表現を用いるなら)「異種混交的な」論考を集めたものである。全体は第1部(「文

学)、第2部(「世界のうちへ」、第3部(「第三世界への参入」と三部にわかたれている。こうした区分は便宜上のものにすぎないが、最後の第3部は著者によってベンガーリー語から英訳された、女性作家マハスウェータ・デヴィのふたつの短篇小説と、著者によるそのうちの一篇の読解からなっており、ここだけを独立させて読むことも可能である。この第3部だけのために本書を購入する価値は充分にあるだろう。ここに収められているのは、本来さまざまな定期行物や論文集に発表された、それ自体がそれぞれ異なるコンテキストを有し、相当な時間的・空間的隔たりによって特定の日付と場所を与えられている論考である。したがって本書は、フェミニズムのある「理論」を体系的に叙述したものではなく、むしろ、ひとりの批評家の活動の記録であり、ある種の自伝であるといえよう。じっさい、本書の随所にその表面的な難解さとはうらはらの、著者の個人的な告白ともとれるきわめてアクチュアルな場からの発言が見られるだろう。

ある種の研究者は、スピヴァックが縦横に引用・引証するテキストの表面的な難解さに直面し、随所に登場するマルクス、フロイト、デリダ、フーコー、クリステヴァ、ラカン、サイドといった名前を聞いただけで、拒絶反応をおこすことだろう。また逆に、そうした固有名のはなばなしい羅列にすっかり魅了され、これら知の巨匠たちの本とならべて本箱＝祭壇のしかるべき場所に本書の位階を定める大学院生もいることだろう。彼女はそうした一見すると対照的ではあるが、実のところ通底している態度から等しく身を離して、さまざまな分野のテキストを脱構築的に読んでゆく。彼女がその知的論争を展開する相手は、文学批評の領域でいえば「合衆国における主流派の文学教育法と文学批評——實際上、『テキストの自律性』、『意図についての誤謬』、さらには『不信の自主的な一時停止』によって困いこまれたもの」(39頁)であり、国際政治経済の領域でいえば、そうした文学教育法と共謀関係にある自由主義的な「主体」の言説によって女性、有色人種、第三世界等々を困いこもうとする「危機管理としての帝国主義が有する認識論的な暴力」(236頁)である。

スピヴァックが意図的、戦略的に用いる武器は「脱構築のいう逆転—置換の形態論」(81頁)である。いまさら繰り返すまでもないことだが、こうした彼女の脱構築的読解それ自体が脱構築的批評＝読解にさらされるのであり、それはいわば両刃の剣となっている。しかしながら彼女は、自閉的な空間へと退行し、選ばれた文学的・批評的方法論にすぎなくなってしまった「狭い意味での脱構築」と、自らその実践者であろうとする「一般的な意味での脱構築」(39頁)とを区別する。

合衆国でもっともよく知られている脱構築の実践の側面は、無限の退行へ向かう傾向である。しかしながら、私にとってもっとも興味のある脱構築の実践の側面は、次のような一連のことがらだ。すなわちまず、その内部でいえば、どのような探究の努力であれ、その出発点は、かりそめの、扱いにくいものであると認識すること。知への意志が対立をつくり出す場となっている共謀関係を暴露すること。その共謀関係を暴露するにあたって、主体——としての——批評家自身が、彼女の批評の対象と共謀関係にあると主張すること。その共謀関係の「痕跡」である、「歴史」と倫理的・政治的なもの——つまりそれは、われわれが、そのような痕跡を免れた、明確に定義された批評的空間に住んでいるわけではない証拠でもある——を強調すること。そして最後に、それ自体の用いる言説が、取りあげる例にとって決して適切ではあり得ないと認めることである(248頁)。

「狭い意味での脱構築」によって「飼いなら」され、アメリカの主流派の文学批評のイデオロギーにもののみごとに適合する脱構築は、いまや誰もがその理論を学習し、それをテキスト読解へと応用することが可能となったひとつの方法である。こうした「他のひとによって展開された『理論』を批評の実践のなかで『応用する』というイデオロギー、なんらかの『人間の学』に見られる解釈

の状況のうちに、文学批評家の務めに類似したものを発見するというイデオロギー」（13頁）を問題にする彼女の批評は、「歴史的契機の『利害=関心』の不均衡」（81頁）を信じることで、脱構築の産出する自閉的な空間に風穴を開けようとする。

さて、本書は安直な要約を頑なに拒み続ける種類のものであるが、与えられた制限の範囲内で、スピヴァックが提起する問題設定とその批評的実践を紹介してゆきたい。マルクス主義、フェミニズム、脱構築の交差する空間に自らを位置づける彼女にとって、ある意味でフェミニズムはひとつの「方法」にすぎないが、「男性中心主義」の言説が文化的帝国主義と共謀関係にある以上、それは本書のすべての章を貫いている主題でもある。そのなかで、第3章「フェミニズムと批評理論」はフェミニズム、マルクス主義、精神分析学、脱構築の相互関係、その布置の変化がどのように彼女自身の仕事に書き込まれてきたかを見てゆく試みとなっている。まず1で、周到な予備的考察を施してマルクスとフロイトが導入され、前者における疎外の観念と後者における正常性と健康の観念が問題にされる。「生産の場所としての子宮という観念は、マルクスによっても、フロイトによっても回避されている」（74頁）とする彼女はマルクスを超えてマルクスを読む可能性を示唆する。これはマルクス主義フェミニズムの問題設定につながるものだろう。次の2では、1には欠けていた「人種の次元」が導入され、精神分析的フェミニズムとマルクス主義フェミニズムへの批判が展開される。双方の側での歴史的敵対関係を十分に認識したうえで、核家族的な子宮中心主義からの離脱として「クリトリスの言説」の分析が紹介されている。続く3はマーガレット・ドラブルの小説『滝』の読解である。ここでは、ドラブルが女主人公の（男性中心主義的な言説からの）脱出を描く際に用いる三人称の語りが問題となる。

自分自身から合理的な、もしくは美的な距離をとるときに、都合よい分類を可能とするマクロ構造に身を委ねること。それが、ドラブルの

『文化としての他者』

三人称の話し手によって演劇化されている措置である。それとは対照的に、あらゆるマクロ構造的な理論を可能にし、またその根底を揺るがすマイクロ構造的な実践の契機に関与するとき、ひとは、いわば一人称の深い海に落ちこむことになる。一人称は、理解と変化の限界、さらにはマイクロ対マクロの対立の不安定な必然性を認識するが、それでもなお決して諦めはしないのだ (91頁)。

スピヴァックによれば、ドラブルの小説では「人種と階級の問題、また性の周縁性の問題をまじめに呈示することは阻まれている」のだ。最後の4は1982年にソウルで起きた、アメリカを本拠にする多国籍企業コントロール・データ社の女性労働者のストライキと、それに続く男性労働者による女性労働者への集団暴行という「出来事」の重層決定因子のチェック・リストの提示からはじまる。第三世界の「文明化」をめざして共謀する「生産性」、「団体的博愛主義」などのイデオロギーに支えられた文化帝国主義が問題となる。固有化の批判によって女性の形象を発見したデリダの批判を通して、『『真正さ=固有さ』——固有財産と、父から譲り受ける固有の姓の双方を生み出すものという意味での——の暴虐」(96頁)が示されている。

このように、スピヴァックの脱構築的な批判の俎上には、ほとんどありとあらゆるフェミニズムが載せられている。自由主義的・ブルジョワ的なフェミニズムはいうにおよばず、マルクスの言説を「凡庸化」する改良主義的・社会主義的なフェミニズム、そして精神分析的フェミニズムおよびマルクス主義的フェミニズム、さらには本質主義と共謀するある種の脱構築主義的な(?)フェミニズムも例外ではない。どこまでも不断に自らの批評的営為を問い直し、その依って立つ基盤をつき崩し続けずにはおれない脱構築の実践にとって、こうした構築—脱構築の反復は不可避のものには違いない。その意味では、本書で展開されている議論が、スピヴァック自身は自らをそこから峻別している脱構築の「無限の退行へと向かう傾向」を免れているとはいいい難いだろう。本書の

論考の道筋には、そのどこを取り出しても奇妙に似通ってしまう金太郎飴的な異種同形性が見られるのである。しかしながら、こうした挙げ足取り的な批判でその先鋭性を囲いこんでしまうことは、誠実なやり方ではないだろう。ジェンダーばかりでなく、階級や人種という変数までもその批評に取り込んで、きわめてアクチュアルな視座から発言するスピヴァックには、脱構築の自閉性を突き破って無限の循環から遁れるだけの強靱さが備わっている。

こうした強靱さを、彼女が旧植民地出身の女性であるという事実や、第一世界の文化帝国主義による第三世界の囲いこみ（これはしばしば物理的な暴力を伴っている）をその主要な問題とすること、英文学の正典に連なるテキストとならんでインドの女性作家の短篇を取りあげて論じていることなどと安易に結びつけるべきではないだろう。「別に私は、労働階級の文化をよく吟味もしないでほめ讃えたり、エリートの基準をこれ見よがしに拒絶したり、あらゆる非ユダヤ教的・キリスト教的な神話に傾倒したり、『ニカラグアで書かれている詩』をおおずと引き合いに出したりするような、さまざまな反動的郷愁を推奨しようというわけではない」（237頁）。しかしながら評者にとって、本書のなかで群を抜いて興味深く読めたのは、マハスウェータ・デヴィのふたつの短篇小説の著者自身による英訳（われわれが読むのはそこからの日本語訳である）「ドラウパーディ」と「乳を与える女」、および後者の脱構築的読解の実践である第10章「副次的なものの文学的表象——第三世界の女性のテキスト」からなる第3部であったことは否定できない。この短篇では、ある富豪の末息子の起こした交通事故のために夫を不具にされてしまった女主人公は、その富豪の家の職業的な乳母となる。母乳を生産し続けるため彼女は夫との性交を労働として行ない、懐胎と授乳を繰り返すことで夫や家族を経済的に支える。容易に想像されるように、この物語には、既成のフェミニズムの諸理論の言説のさまざまなレヴェルでの転倒—置換が見られるだろう。ちなみに、「乳を与える女」という邦訳題はやはり「乳房を与える女」とすべきであったろう。これについては、「乳房を、いい換えれば、生産の疎外された手段、部分対象、母親としての

女性の特徴的器官を与える者を意味する」表題の力強さについての著者自身による説明を参照されたい（378頁）。

さて、この短篇を読むにあたって著者が依拠するのは、「副次的なもの the Subaltern」という概念である。“Subaltern”という形容詞は「地位、特質、重要性において劣位にある：位階、権力、権威、行為において従属的な、または劣等の」（『オックスフォード英語大辞典』）という意味をもっており、ここでは広く一般的に、国籍、階級、ジェンダー、年齢、職業などの点で構造的な劣位にあるものの優位にあるものへの従属の様態を示す言葉として戦略的に用いられている。この語の政治的文脈におけるこうした用法は、グラムシに由来するとのことであるが、インド近代史研究の分野に変革をもたらそうとする研究者の一群は「サブアルタン・スタディーズ・グループ」と呼ばれている。スピヴァックは彼らの研究から多くの重要な示唆を得ると同時に、いくつかの疑義を提起している。

本章は歴史家と文学教師（あるいは歴史と文学）という古くからの対立を出発点として、フーコーのいう意味での「言表 énonciation」によって位置づけられる主体の占めるさまざまな場に読者の注意を喚起することからはじまる。こうした「私」の場としては作者、読者、教師、副次的存在、歴史家が挙げられているが、これら主体の占めるいくつかの位置からの「乳を与える女」のいく通りもの読みが展開されてゆく。扱われるのは、副次的存在に関するテクストの読解を行なうさまざまなエリートのアプローチの提起する問題である。

「副次的」素材に対して「エリート的」方法論をとることへの抵抗は、認識論的／存在論的な混乱を招きやすい。その混乱は、「副次的存在がエリートではない（存在論）のと同じように、歴史家はエリート的方法によって知ってはならない（認識論）」という承認されぬ類似関係のなかで生じる。

しかしこれは、さらに大きな混乱の一部にすぎない。男性がフェミ

ニズムを理論化することができるか、白人が人種差別主義を理論化することができるか、ブルジョワが革命を理論化することができるかといったことがらにまつわる混乱である。その状況が政治的に耐えがたいものとなるのは、前者のグループだけが理論化するときなのだ。そこで、これらのグループの成員が、自分に割り当てられた主体の位置に常に気を配っていることが決定的に重要なこととなる。しかしながら、第二の名辞のグループに含まれる集合体が、自分自身に関する知識の生産に参加しはじめるとき、第一のグループを腐敗させている特権の構造のどこかに、自らも場所を有しているに違いないということを忘れ去るのは、不誠実というものであろう（349-350頁）。

フェミニズムの主流派内の人種的偏見、英語に翻訳された第三世界の文学のテクストを貪欲に求める博愛主義的な衝動、精神分析を制度化し、その主張された科学性を植民地に押しつける歴史的過程などに注意を向けつつ、スピヴァックはそれらさまざまな読解による囲いこみになお抵抗する「乳を与える女」の奏である不協和音に耳を傾けるようわれわれを促す。こうして示唆されるのは、「オルガスムスの快感ではなく、主体の再生産＝生殖の循環から逃走する、存在の過剰」（362頁）としての「快樂」である。ジェンダー化された主体である女主人公の肉体はそうした「快樂」としての思考のひとつの場として示される（これは、周到なスピヴァックの読解の、絶望的なまでに単純な要約であることを蛇足ながらつけ加えておく）。

実のところ、本書を読んでいる間、評者の頭を離れなかったのは「翻訳」の問題であった。おそらくは時間的制約のためであろう、本書には脱字、活字の置換、タイトルの表記ミス（たとえば397頁の *Discipline and Pursuit* は *Discipline and Punish* である）などが目立つが、それはここでは瑣末なことである。訳文のいわゆる「こなれのよさ」や（たとえば本書中に頻出する「分節化する」という表現などは単に「明確にする」で充分ではないかといった）訳語

『文化としての他者』

の選択の是非（それ自体は重要なことであるが）を論じたいのでもない。原著を傍らに置くのではなく本書を読み進む者は、もとの英語を推測し、頭のなかで日本語を英語に置き換えながら読むという作業を強いられることになるだろうが、これはこの種の理論的な著作の翻訳にはよくある現象で、必ずしも訳者たちの責任とはいえないもっと大きな問題の一部である。全体として、訳者たちの仕事は非常に誠実かつ周到なものであるといえるだろう。

評者が考えていたのは文化としての、あるいは複数の文化の交通（相互参入ないしは覇権をめぐる果てしない闘争）としての「翻訳」の問題である。それは、本書の原題 *In Other Worlds* の直訳を避けて選択された魅力的な邦訳題である『文化としての他者』（これは本書とはまったく別の内容のものをわれわれに期待させるものだが、訳者たちによる意図的な「誤読」なのであろう）の問題でもある。ここで「翻訳論」を十分に展開する余裕はないが、狭い範囲でいえば、評者を悩ませ続けたのは、大学教育や研究の日米におけるあり方の違いであり、わが国における制度としての「翻訳」の問題である。言い換えるならば、「新批評」、「構造主義批評」、「精神分析批評」、「記号論」、「ポスト・モダニズム」、「脱構築」、「ニュー・ヒストリシズム」等々が「さまざまな意匠」のひとつとして次々と登場しては消えてゆく日本の英米文学批評（学問）のあり方の問題であり、原著を読むより難解な訳書がどんどん出版され市場に流通してゆく「翻訳文化」の様態の問題である（断っておくが、評者はこれらすべてをただ単に否定的に「問題化」しているのではない）。わが国の「学問」は、欧米中心の文化的帝国主義の刻印を帯びたものとして、重層的に決定されている。たとえば、評者の「専門」分野である日本の「英文学」という制度の重層決定因子を読解してゆくことは、今日のような国際政治経済の状況のもとでは、非常に興味深く、重要な作業となることだろう。

話が既成の「フェミニズム」の範囲から大きく逸脱してしまったが、本書は実にさまざまなことを評者に考えさせてくれた。はじめにも述べたように、異種混交的なスピヴァックの批評的営為は、学問の諸分野間の壁を自由に横断す

『文化としての他者』

る。同時にそれは、大学におけるカリキュラム配分や文学の教育制度、今日の人文科学が配置されている周縁性などといった、われわれにもきわめて身近なミクロ的な議論から、地球的規模で進行する第三世界の第一世界への従属、それに伴うさまざまな形態の暴力といったマクロ的な議論まで大胆に縦断する。脱構築を武器としながら、それを制度的な高等言語遊戯へと自閉させることを拒絶すること。女性（副次的存在）でありながら、それが従属させられている男性中心的な言説（エリート的なアプローチ）によって語ること。「学問」という制度の内部にとどまりながら、その制度を支えている「理論と実践」、「内部と外部」といった諸対立に脱構築的なゆさぶりをかけ続けること。彼女の活動はこうした一連の決意によって支えられているように思われる。その戦略は、あえて単純化してしまえば「いかなる文化のうちにあっても常に他者であり続けること」となるだろう。こうした強靱さとある種のナイーヴさをあわせもつスピヴァックの執拗なまでの批評的实践は、既成の学問制度内に安住し、断固としてそこにとどまり続ける「大学人」たちを、「ほんまにようやるわ」と辟易させ続けてくれるに違いない。

（紀伊國屋書店、1990年12月、本文438頁、3800円）